

# 人間性の構造

—新しい人間像のために—

教育哲学研究室

中 垣 啓

## Structure of Human Nature —Towards a new image of the human— Akira Nakagaki

The purpose of this study is to clarify the structure of human nature so as to make it possible to synthesize various kinds of outlooks of human beings and to prepare to image what human beings should be from now on.

First of all, the writer gives the definition of the word 'human nature' as the total system of desires that all human beings have in common in the capacity of Homo Sapiens, biologically speaking. And paying attention to human nervous system, of which the hierarchical structure is formalized by a physiologist, T. Tokizane, the writer divides human behaviors into four levels, namely, reflex and regulative behavior, instinctive behavior, adaptive behavior and value-oriented behavior. Then, some kinds of desires are made to correspond to each level of behavior according to what kind of desire is required to drive that behavior. So, there are four levels of desires, namely, the physiological desires (the most elementary desires), the instinctive desires (the first elementary desires), the learning desires (the second elementary desires) and the existential desires (the third elementary desires). The most elementary desires are needs for sleep, breathing and excretion, the second elementary desires include all those which are necessary for the maintenance of individuals and species. The second elementary desires are those of feeling, cognition, exercise and symbolization which make possible various kind of learning behaviors and the third elementary desires can be divided from the ontological point of view into three aspects, that is, the desires of self-estimation, self-actualization and self-integration, of which the relation is circular.

With this preliminary analysis, the writer presents the model of the hierarchical structure of desires divided into four levels. At the same time, this model shows, by definition, the total structure of human nature. In the past, many kind of outlooks of human beings were apt to assert to be able to explain all the human behaviors by one or two special desires, for example in case of S. Freud, or by the special level of desires. The outlook of human beings that may be imaged from the law that controls the physiological desires is to compare a man to a kind of delicate machine. If the first or second elementary desires were regarded as the most essential urge for a man, then the outlook of human beings would be imaged as if a man were a rat or an ape. The view that the existential desires, especially self-actualization desire, are the most fundamental for a man will lead us to image human beings as active and creative beings.

All these these opinions are not always wrong but partial because of neglecting the hierarchical structure of human desires. Finally, the writer suggests the possibility to synthesize these various kind of outlooks of human beings from the viewpoint of the total structure of human beings.

## はじめに

あらゆる教育観は、その背後に、ある人間観を前提としている。人間を機械的存在とみるか創造的存在とみるか、あるいは能動的存在とみるか受動的存在とみるかによって、その人間の懐く教育観も大きく異ならざるを得ない。事実、カソリックの権威主義的教育観の背後には、原罪を荷った人間という人間性への不信、性悪説の人間観があり、J・J・ルソーの消極主義、自然主義の教育論も、「自然の最初の衝動は常に正しい<sup>(1)</sup>」という人間性への信頼、性善説の人間観の前提の上に築かれているのである。

また、現場における日々の教育実践においても、人間（子供、生徒）を如何に捉えるかに従って、学習指導の方法も異ってくるのである。なぜなら、学習の動機づけとして、動因低減説（C・ハル）を採用するか、内発的動機づけ（J・McV・ハント）を採用するかは、単なる教育方法論の問題を越えて、その背後に、人間を活動的存在とみるか否かという人間観の対立が存在するのである。さらに言えば、教育革新の時代とか、第三の教育改革期とかいう次元を越えて、K・ポールディングの指摘する如く<sup>(2)</sup>、文明的にみて大きな転換期にさしかかっている今日、新しい時代に相応しい新しい人間像が切実に求められているのである。

しかし、新しい人間像と言っても、単なる主観的願望の吐露に終ってはならず、様々な学問分野において明らかにされた知見を総合しつつ、科学的な根拠をもって提示されねばならないであろう。本論文は、様々な教育観、学習理論の背後にある人間観を総合し、時代の要請に答える新しい人間像を積極的に構築していくための基礎作業として、人間をその普遍的位相において捉えること、言いかえれば〈人間性〉（人間的自然＝Human Nature）を明らかにしようとする一つのささやかな試みである。

## I 人間性の定義

議論の前提として、まず人間性の定義を与えておく。

『人間性とは、生物種としてのホモ・サピエンスが、可能態としては普遍的にもつ欲求の体系であって、その普遍性の生理学的根拠は、脳神経系の構造および機能の同一性にある』

ここで、欲求とは、人間の行為とそれに伴う脳神経系の生理的過程とを結ぶ媒介概念であり、ホモ・サピエンスとは、厳密に言えば、新人のことである。現代の人類

は、すべて新人であるから同一の脳神経系をもち、従って同一の欲求の体系を持つから、定義より〈人間性は普遍である〉という結論になる<sup>(1)</sup>。しかし、ここでいう「普遍」とは、「潜在的には、すべての人類に共通である」という意味であって、生まれた時から、脳神経系の中に、普遍的な人間性が内在しているという意味ではない。社会の中で生れ育ち、文化を内在化することによってのみ、可能態としての人間性が、現実態として発展し、開花してくるのである。

人間性の中核概念として〈欲求〉という概念を設定することは、極めて重要である。なぜなら、人間性という概念は、人間の様々な行動から人間が人間であるための特質として抽象された概念であり、このような人間の特質を知るためには、今ここに生きる人間たちが、現実になにを欲し、何に喜びを感じるかを知らねばならないからである。サルトルも「欲求についての直接的理解なしには、……当面とりあげられた学問がいかなるものであれ、その最も基本的な観念でさえも……理解されないであろう<sup>(2)</sup>」というように、人間についての諸学の基礎として、人間学のプロレゴメナとして、欲求の理解が必要不可欠なのである。例えば、これまで思想史上にあらわれた様々な人間観の多くは、結局のところ、人間の根本的衝動に対する見解の相違に由来する。あるいは、性善説と性悪説、利己主義と利他主義、快楽主義と禁欲主義の対立もまた、同じ問題に帰着する。さらに人間存在の両義性即ち、理性的動物（カント）、考える葦（パスカル）、有限な存在でありながら無限な形而上学的実体を求める存在（ショーペンハウエル）、環境に束縛されていながら、それに距離をとりうる存在（ロータッカー）というような矛盾した存在も、あらゆる粉飾を取り払って考えれば、人間的欲求の矛盾にみちた階層構造に還元しうるのである。

従って、人間の基本的欲求を包括的に把握し、互に相剋する多様な人間観を、包括的な人間性の階層構造の各部分、各階層に位置づけることによって、教育観の背後にある人間観の対立を止揚すると同時に、それらを総合した全体の人間像を提示しうる展望が開けるのである。

## II 人間性の階層性と脳神経系

人間性の普遍性の根拠を脳神経系の構造と機能に求める以上、まず、ヒトの脳神経の構造と機能を明らかにし、それと人間性との連関を考察しなければならない。

時実利彦は、脳神経系をその構造と機能によって、三つの統合系、即ち脳幹・脊髄系と大脳辺縁系と新皮質系

に区別している<sup>(1)</sup>。そして、それぞれの統合系の統合機能として、脳幹・脊髄系には、反射活動、調節作用、大脳辺縁系には、本能行動、情動行動、新皮質系には、適応行動、愛と創造の行為をあげている。ところで、愛と創造の行為の統合の座は、新皮質の前頭連合野であるが、この部分は、他の新皮質と機能において区別されるばかりでなく、構造においても違っていること、人類において最も発達している連合野であること、人間を人間たらしめている機能にあずかっていること等の点において、適応行動を司る新皮質系と区別するのが適切である。従って、前頭連合野を統合の座とする統合系を、ここでは前頭連合野系として独立させることにする。

脳神経系の四つの統合系と、それぞれの統合の座および統合機能を表示すると次のようになる。

|     | 統合系    | 統合の座           | 統合機能<br>(時実による) |
|-----|--------|----------------|-----------------|
| (1) | 脳幹脊髄系  | 脳幹・脊髄          | 反射活動・調節作用       |
| (2) | 大脳辺縁系  | 古皮質・旧皮質        | 本能行動・情動行動       |
| (3) | 新皮質系   | 前頭連合以外の<br>新皮質 | 適応行為            |
| (4) | 前頭連合野系 | 前頭連合野          | 愛と創造の行為         |

ところで、あらゆる行為には、必然的に脳・神経系の何らかの生理的過程が伴い、欲求は、行為に伴う脳・神経系の生理的過程を心理的次元で表現した概念であるから<sup>(2)</sup>、欲求の分類基準として脳・神経系の構造と機能に求めることができる。この立場は、次のような進化論的見地を承認することでもある。即ち、脳・神経系の構造と機能は、行動様式の進化史の反映であること、つまり、魚類、両生類、爬虫類、哺乳類という脊椎動物の進化系列において、一貫した大脳化現象があり、単に脳重の量的増大のみならず、その構造においても、新たな分化現象がみられること、即ち古い脳構造の上により高度な、より複雑な構造をもつ新しい皮質がつけ加えられ、古い脳構造の機能を修正し、コントロールしていること、そして、それに伴って、行動の次元においても、より高度な、より複雑な適応が可能になってきたことである。この新しい行動様式の出現に対応して、新たな欲求を導入し、その欲求を、その行動様式を可能にする脳・神経系の機能に対応させるのである。言い換えれば、原始的な動物から高等動物へ移行するに伴って、即ち、大脳皮質の発達と機能分化に伴って、新たな行動様式が獲得され、この獲得された行動様式に対応して、その行動を駆動する新たな欲求を導入し、その欲求が、新たに分化、形成された脳・神経系において統合されているものと見なすのである。脊椎動物における脳・神経系の統合系の系統

発生段階は、古い順に脳幹・脊髄系、大脳辺縁系、新皮質系、前頭連合野系であり、それぞれの統合系が主要な役割を果たしている脊椎動物の種類を極くおおまかに対応させると次のようになる<sup>(3)</sup>。

- 脳幹・脊髄系……魚類および両生類
- 大脳辺縁系……爬虫類および下等哺乳類
- 新皮質系……高等哺乳類
- 前頭連合野系……人類 (ホモ・サピエンス)

多様な欲求のうち、脳神経系の各統合系の統合機能に、直接対応する欲求を〈基本的欲求〉と名付け、各統合系に対応する基本的欲求を総称して次のように命名する。

- ① 脳幹・脊髄系……第0次基本的欲求
- ② 大脳辺縁系……第一次基本的欲求
- ③ 新皮質系……第二次基本的欲求
- ④ 前頭連合野系……第三次基本的欲求

欲求の分類基準を脳・神経系の構造と機能に求めることの利点は、何よりも分類基準が明確であることである。これまでの欲求分類の多くは、様々な欲求の平面的羅列に終わっているため、欲求間の相互関係は適切に論じることができなかった。しかし、この分類基準では、脳・神経系の四つの統合系に対応して、欲求を四つの層位をもつ階層構造において捉え、欲求の質や強度や必要性欲求発生メカニズム、その欲求充足に伴う感情、欲求の展開性と二重性、動物的欲求の人間化、あるいは欲求相互の規定関係、支配関係等を脳・神経系の系統発生的および個体発生的見地より論ずることを可能にするのである。従ってこのような観点は、人間存在のダイナミズムを理解する上で、極めて重要な貢献をすることを期待するのである。

また、〈基本的欲求〉とは、脳神経系の構造と機能にその基礎をもつという意味であって、生得的欲求という意味ではない。階層性原理の特性としての前進的機械化<sup>(4)</sup>によって、低次の欲求は、機械化自動化され、ほとんど学習の必要のない欲求も存在するが、高次の基本的欲求になるに従って、適当な環境条件がなければ、現実化しえず、たとえ現実化しても、その強度や必要性において未発達のままにとどまるのである。高次の基本的欲求ほど人間化の推進力であったとするなら、このことは、人間が人間的であるための教育の必要性を強く示唆しているのである。

### III 基本的欲求の種類

#### 1. 第0次基本的欲求の種類

第0次基本的欲求は、脳幹・脊髄系において統合されている行動、即ち反射活動や調節作用に対応する欲求である。脳幹・脊髄系で統合されている機能のうち、意志過程がある程度介入しうるのは、脊髄性自律機序である排便排尿、脳幹性自律機序である呼吸、視床下部性自律機序である休息睡眠の三つである。従って、これらに対応する欲求は、〈排泄の欲求〉〈呼吸の欲求〉、〈休息睡眠の欲求〉の三つである。これらの欲求は次の第一次基本的欲求と違って、意志によって一時的に阻止しうるが、個体の死に至るまで、それを貫徹することができず、体内の生理的不均衡の心理過程への直接的反映であるという意味において〈生理的欲求〉といえることができる。これらは、いうまでもなく生命維持にとって最も根源的な欲求である。

第0次基本的欲求 (生理的欲求) { 排泄の欲求 ……脊髄性自律機序  
呼吸の欲求 ……脳幹性自律機序  
休息・睡眠の欲求…視床下部性自律機序

#### 2. 第一次基本的欲求

第一次基本的欲求は、大脳辺縁系によって統合されている行動に対応する欲求である。時実には、大脳辺縁系で基本的に統合されている行動として、①食行動②飲行動③性行動④集団行動⑤情動行動を挙げている。また、A・フィッシャーの実験は、母性的行動も大脳辺縁系の統合機能であることを示している<sup>(1)</sup>。時実のいう情動行動は、怒りにもとづく攻撃行動、怖れにもとづく逃避行動であるから、第一次基本的欲求は、個体保存に直接かかわる〈摂食摂水の欲求〉、〈安全の欲求〉、種属維持に直接かかわる〈性的欲求〉、〈哺育の欲求〉、他者との基本的な社会性にかかわる〈所属の欲求〉、〈攻撃の欲求〉に整理できるであろう。

しかし、〈攻撃の欲求〉を基本的欲求とするごとに對して多くの批判が予想される。例えば、R・ハロウエイは『人類の攻撃的行動』についての報告において「人類では、本能の現われとみるべきものは、……極めて少く、攻撃本能に対しては、何らの証拠もないように思われる<sup>(2)</sup>。」といい、社会的経済的諸条件ぬきに、人間の攻撃性を論じることを批判している。これに対し、K・ローレンツは「生物学の素養を持った科学者の意見では、種内攻撃は、大抵の他の高等脊椎動物におけると同じよう

に、人間においてはほとんど無意識的な本能的衝動であるということには、全く疑問の余地がない<sup>(3)</sup>」と断言している。進化論的にみれば、動物段階の諸欲求が人類の段階において、突如消失するのではなく、一般の高等動物が共通に持っている諸欲求は、人類もすべて備えていると見るのが妥当であり、この見地からみて、人間が動物から区別されるのは、動物段階の諸欲求を土台にして、それらをコントロールする新しい質の欲求を獲得した点にあるのである。このことは、脊椎動物の脳神経系の系統進化の過程は、古い脳に代って、新しい脳が置き代るのではなく、古い脳を土台にして新しい脳が分化発達し、古い脳の上に重ねあわされることから推測できる。従って、筆者も〈攻撃の欲求〉を基本的欲求として承認したい。

第一次基本的欲求は、従来本能として、記述されてきたものであるから、これらを総称して〈本能的欲求〉ということもできる。

第一次基本的欲求 (本能的欲求) { 個体保存の欲求 { 摂食摂水の欲求  
安全の欲求  
種属保存の欲求 { 性的欲求  
哺育の欲求  
基本的社会性の欲求 { 所属の欲求  
攻撃の欲求

#### 3. 第二次基本的欲求

第二次基本的欲求は、新皮質系において統合されている行為に対応する欲求である。新皮質系の統合機能は、個体の外部環境から視覚、聴覚、味覚、触覚として情報を受け取り、それを象徴やサインとしてシンボル化し記憶として記録、保持し、既に蓄積された記憶と比較検討して外部環境にあるものとして知覚、認知し、それによってある判断を下し、その判断に基づいて環境に働きかけるために、随意運動をおこす命令を各筋肉に送ることである。従って、新皮質系で統合されている機能は、感覚すること(視覚、聴覚、触覚、味覚等を含む)、シンボル化すること、認知すること(知覚、思考、判断、記憶を含む)、活動することに要約でき、それぞれに対応して〈感性的欲求〉、〈シンボル化の欲求〉、〈認知の欲求〉、〈活動の欲求〉を考えることができる。

しかし、従来、これらの欲求は基本的欲求ではなく、第一次基本的欲求から派生してきたものと考えられてきた。例えば、J・ダラードやN・ミラーらは、これらの欲求を生理的欲求と結びつけた中性刺激が、それ自身で動因を喚起する働きを持つようになるという獲得性の欲求<sup>(1)</sup>として、フロイトは、性的欲求や攻撃的衝動に對す

る自我防衛機制の一種である昇華とした<sup>(2)</sup>、オルポートは原初的な生理的欲求が成長とともに分化し、それぞれが機能的に自律化した欲求となるという機能的自律性<sup>(3)</sup>はよって説明してきた。

これに対し、本能論者は好奇本能、遊戯本能として、あるいは人類学者のR・リントンは、新奇な経験を求める欲求<sup>(4)</sup>として、これらの欲求を基本的なものとして位置づけた。脳神経系の系統進化史の立場から見れば、新皮質系は、大脳辺縁系で営まれている本能的情動的なステレオタイプ化した行動を修正し、より外部環境に適応した行動を可能にするために発達した統合系であるから、系統発生的には、第二次基本的欲求は、第一次基本的欲求である個体保存の欲求や種属保存の欲求をより確実に、より安全に満すために派生してきた欲求と考えることができる。しかし、ひとたびそれらの欲求を可能にする神経学的基礎である新皮質系が発達すれば、その新皮質系を働かせること自体が独立した欲求となることが予想される。つまり、脳神経系の系統発生において、新皮質系が独立した統合系として発達するにつれて、個体発生のレベルでは、新皮質系の使用そのものの欲求が自律化し、発達した新皮質系をもつ動物は、すべて基本的にこれらの欲求をもっていると考えることができる。

これらの欲求が如何に基本的であるかは、様々な実験や観察から証拠づけられている。例えば、感覚遮断の実験<sup>(5)</sup>は、適当な感覚刺激を求める欲求が、正常な精神的諸機能を維持するために如何に切実であるかを物語っている。バトラーの視覚探索装置による実験<sup>(6)</sup>は、新奇な刺激を求める欲求の存在を物語っている。またサルは外的な報酬なしに機械仕掛けのパズルを解くことを学習するというハローの実験<sup>(7)</sup>は、認知すること、活動すること自体の欲求の存在を批判の余地のない位明白に示している。従って、〈感性的欲求〉、〈認知の欲求〉、〈活動の欲求〉は基本的欲求であり、好奇心や探索心、あるいは遊戯本能とよばれる欲求は、これら三つの欲求の複合体とみることができるであろう。また、〈シンボル化の欲求〉は、動物実験によっては明らかにすることはできないが、これも、新皮質の言語野に対応する「人間のみに明白に現われている基本的欲求<sup>(8)</sup>」であろう。

第二次基本的欲求をその生物学的意義から考察すれば、この欲求は、環境の情報処理の能力を練成増進する学習を動機づけるものであるから、結果的に環境に対して、より適切に行動しうるようになるという意味において、間接的な生物学的必要性を有しているのであるが、個体保存や種属保存といった直接的な生存上の必要性から解放されている時でも、その行為自体の楽しさとして追求

される欲求であるという意味において、人間性論にとって極めて重要な欲求である。これらの欲求を総称して、〈学習欲求〉ということもできよう。

第二次基本的欲求  
(学習欲求)

- 感性的欲求
- 認知の欲求
- 活動の欲求
- シンボル化の欲求

#### 4. 第三次基本的欲求

第三次基本的欲求は、前頭連合野系の統合機能に対応する欲求である。時実によれば、前頭連合野の統合機能は意志力である。つまり、脳神経系の興奮と抑制による制御である。また、思考の基本的な機構は、新皮質系で統合されているとしても、前頭連合野の発達によって、思考過程をどこまでも統制しうようになり、思考力の飛躍的発展が可能になったと考えることができる。

では、意志力と思考能力の飛躍的発達を獲得することによって、新たに生ずる欲求は何であろうか、まず、意志力の発達によって、人間の行動は、体内の生理的不均衡の単純な反映でも外部の刺激条件の単純な関数でもなくなり、それらを抑制したり無視したり、あるいは特定の対象に対して注意を集中したりできるようになる、即ち、内外の環境に対して一定の距離を取りうるようになる。そのことと密接に関連して、思考能力の飛躍的発達は、内外の現実的環境の世界とは、直接的つながりをもたない独自の思考の世界を作り上げることができるようになる。

以上の結果として、人間は、「今」「ここ」にしばられた存在ではなく、空間的には対象の世界とは区別された存在として、時間的には過去から未来への時間の流れの一点に位置する存在として、自己を明晰に意識することができるようになる。

明晰な自己意識の成立は、人間の欲求を論ずる上で極めて重要である。なぜなら、自己意識の成立は、自己と他者、自己と世界の真の分裂であり、主体としての自我(主我)と客体としての自我(客我)の分裂であるから、動物におけるような、われわれが自己意識を持たなかったあの幼年期におけるような調和を完全に破壊してしまうからである。人間が「今」「ここ」に束縛されない独自の思考の世界にも住むようになることは、逆にいえば、この現実の世界においては、この世界のただ中に投げ出されていることを知ることである、もはや、幼少期における自己と他者、自己と世界との一体感は失われ、自分自身の力で調和を回復せねばならないのである。E・フロムが「人間の実存にひそむもろもろの矛盾に対して、

いつも新しい解答を見出し、自然とも同胞とも、自分自身とも、いつも高度の調和のかたちをみいださねばならないという必要性は、人間にあらゆる情熱や愛情や不安をひきおこすあらゆる精神力の源泉なのである<sup>(1)</sup>。」というのもこのことであり、第三次基本的欲求は、人間のみ〈実存〉するという人間の存在論的構造そのものに由来するのである。結論を先取りして言えば、第三次基本的欲求は、〈自己規定の欲求〉、〈自己実現の欲求〉、〈自己統合の欲求〉として現象し、それらを総称して〈実存的欲求〉ということもできる。

#### (1) 自己規定の欲求

自己意識の成立によって必然的に現われる欲求は、まず、分裂した自己と他者、自己と世界、主我と客我との関係づけを求め、調和を求め、他の存在に対する自己の意味づけを求める欲求である。これが〈自己規定の欲求〉である。

自己規定の欲求は、生物学的見地よりすれば、全く生存上の必要性から解放されている。それどころか、場合によっては生物的必要性に背馳する現象さえ生み出す欲求である。なぜなら、精神科医であるV・フランクが「精神因神経症の根源を探ってみるならば、常に繰り返す、病因的基盤として、結局、意味の意志とわれわれが呼ぶところのものの不充足、挫折を確認することができる<sup>(2)</sup>」といて、自己規定の欲求の不充足が神経症の原因になることを指摘しているし、その極限的な事態として、第一次基本的欲求とは、真向うから対立する自殺の欲求さえ生み出すからである。「人間は、自殺することのできる唯一の動物である」という人間規定の仕方は、自己規定の欲求が、何ら生物的効用を持たないにもかかわらず、人間にとって如何に根源的な欲求であるかを、その否定的側面から照射した規定であろう。

自己規定の欲求は、人間のみ自己自身を意識の対象にすることができるという人間の〈対自存在 (être-pour-soi)<sup>(3)</sup>〉(サルトル)に由来するものであるから、この欲求を〈対自欲求〉と名付けることもできる。また、この欲求によって生み出された文化の最も洗練された形態は哲学である。

#### (2) 自己実現の欲求

思考能力の飛躍的発達には、人類のみにみられる形式的思考を可能にし、様々な仮設を取り扱ったり、具体的現実的に確かめられる事象の単なる記述とはちがった、命題による推理が可能となる。このことによって、現実を可能な諸変換の中に位置づけ、現実への単なる適応を越えて、大いなる理想とか理論を構想しうようになる。価値の世界でも、具体的で現実的な事物にとどまらず、

抽象的超個人的シンボル(神話、イデオロギー、社会正義の観念など)に対しても価値を見いだすようになる<sup>(4)</sup>。このような形式的思考は、意識の対象となった自己に対しても適用され、現実の自己をありうべき諸々の自己の中に位置づけ、あるべき自己、理想的な自己を構想しうようになる。ここに、自己規定の欲求は、そこにとどまることができず、あるがままの自己(現実我)を越えて、形式的思考の世界で構想され予見された、あるべき自己(理想我)を実現しようとする欲求が生ずる根拠がある。これが〈自己実現の欲求〉である。

サルトルは、人間存在(対自存在)の存在論的構造そのもののうちに、人間の自己実現傾向が内在していることを指摘している。即ち人間存在は〈それがあらぬところのものであり、それがあるところのものであるような存在<sup>(5)</sup>〉(l'être qui est ce qu'il n'est pas et qui n'est pas ce qu'il est)、言い換えれば、「人間は、自己を実現するかぎりにおいてのみ存在する<sup>(6)</sup>」のである。このように、人間は、現にあるところの自己を、未だあらぬところの諸可能性に向って、不断に形成していこうとする傾向があり、その傾向を指して〈脱自(ex-stase)〉(サルトル)と呼ぶなら、自己実現の欲求は、〈脱自欲求〉ともいいうるであろう。

自己実現の欲求の存在は、様々な学問分野において増々確かなものとして確認されつつある。臨床心理学者であるC・ロズバースは、長年の心理療法の体験から「人間存在とは、より排他的な豊かな経験を求めて進んでいく、自己実現の過程である<sup>(7)</sup>。」と、自己実現傾向を基本的動因として指摘しているし、精神病理学者のK・ゴールドシュタインも、「できるだけ十分に自分自身を發揮していこうとする傾向は、基本的な衝動であって、それは病的な生体を動かす唯一の衝動であるが、また正常な生体の生活も同じように動かされるものだから……自己実現の傾向が唯一の衝動と考えなければならない<sup>(8)</sup>」と自己実現の衝動を唯一の基本的動因としている。

また、人格心理学者であるA・マスローは、肉体的にも精神的にも健康な人との直接面接やアンケート調査から、彼の欲求階層理論における最後の段階として、即ち(1)生理的欲求(2)安全の欲求(3)所属と愛情の欲求(4)承認(尊敬)の欲求が満されている場合に出現する欲求として(5)自己実現の欲求を見いだしており<sup>(9)</sup>、前二者のように、それを唯一の衝動とせず、低次の欲求とは区別された最高次の欲求として位置づけた点において、筆者のいう自己実現の欲求に近いものである。

ところで、自己実現といっても、空虚な個人的観想によって可能なのではなく、何らかの対象を媒介として、

それとの格闘を通して、対象的世界に自己の理想や価値を実現することを通して、自己自身が変革され実現されるのである。事物（および事物のシンボル）を媒介とする自己実現は〈変革〉であり、他者（および他者のシンボル）を媒介とする自己実現は〈交流〉である。従って、自己実現の欲求は〈変革の欲求〉と〈交流の欲求〉として現われる。

変革の欲求の最も肯定的な姿が〈創造の欲求〉であり、最も否定的な姿が〈破壊の欲求〉である。マルクスが「労働は……それにおいて人間が、人間の自然との質料変換を自分自身の行為によって媒介し、規制し、統制する一過程である<sup>(10)</sup>」というように、変革の欲求に対応する文化形式は労働（狭義）に他ならない。さらに、「彼は、この運動により自分の外部の自然に働きかけてこれを変化させることによって、同時に自分自身の自然を変化させる<sup>(11)</sup>」というように、労働を通して、自己が変革され実現されることをはっきりと指摘している。

交流の欲求は、他者を媒介とする自己実現の欲求である。このことは、何を意味するのであろうか。先に、自己意識の成立は、前頭連合野の発達によることをのべたが、それは必要条件であって、十分条件ではない。なぜなら、フイエルバッハもいうように「人間はもっぱら他人に即して自己を明白にし、且つ自己を意識する、全く孤立して生存する人間は、自己を知らず、且つ区別を知らずに自然という大洋の中で自己を失う<sup>(12)</sup>」からである。従って「自己意識は、大部分、かれが他人に与えた自分についての観念が直接に反映したものであり、直接的間接的にある社会生活の産物に他ならない<sup>(13)</sup>。」のである。この事実は、自己が人間（対自存在）として存在するための必須の条件として他者（社会）が要請され、他者との交流を通してしか自己の意味や価値は表現されないということの意味する。自己は自分の意味や価値を他者から受け取っているのであるから、他者との交流と連帯を通して、自己をより意味深く、より価値あるものとして実現していこうとする欲求が〈交流の欲求〉である。その最も肯定的な姿が〈愛〉であり、最も否定的な姿が〈増悪〉である。

自己実現の欲求は、現実には変革を通しての交流、交流を通しての変革という相互媒介的構造の中で充足されるのである<sup>(14)</sup>から、この欲求の生み出す結果に注目すれば、価値実現の欲求であり、広狭の労働の欲求である。

### (3) 自己統合の欲求

0次から二次までの基本的欲求をすべて充足し、自己規定、自己実現の欲求も充足している人間にも、なお残りの欲求、なお満されざる欲求は何であらうか。それ

は、この宇宙における人間存在の有限性からやってくる。パスカルの表現を借りれば、「自然によって与えられた全体のなかに、無限と虚無とのこの二つの深淵のあいだに、懸けられている自己をみて、彼はこの驚異の前に恐れおののくであらう。……そもそも人間は自然のうちにおいて何ものであろうか？ 無限に比しては虚無、虚無に比しては全体。無と全体とのあいだの中間者<sup>(15)</sup>。」が人間の姿なのである。このことは、空間的有限性ばかりでなく、時間軸においても同様であり、人間は、いや人類でさえもいつかは死滅せねばならない有限な存在なのである。

では、人間存在の有限性からくる欲求は何であらうか。パスカルが「われわれは渺々たる中間の波間に漂い、つねに定めなく浮動しつつ、一方の端から他方の端へ押し流されている。われわれはいずれかの端にわが自身をつなぎとめ、安定を得たいと思っても、それは揺めいて、われわれを離れる。……われわれは固い地盤と、究極の揺ざなき根柢を得て、その上に、無限に高くそびえ立つ一つの塔を築きたいと熱望している<sup>(16)</sup>。」というように、この時空の深淵を垣間見、自己の生の虚しさに茫然自失しそうになった人間は、何とか絶対確実な存在、おのれの生の意味をしっかりと支え、おのれの存在に永遠の価値を付与してくれる絶対不動の存在に融合一体化しようとする。こうして自己の幼少期におけるような、あるいは動物におけるような何の不安も何の疑問も持たぬ全き調和の世界へ還ろうとする。このような欲求こそ〈自己統合の欲求〉である。

人間にこのような欲求が存在することをサルトルは、彼の存在論より導き出す。即ち、「対自は、自己自身に対して自己自身の存在欠如であるような存在である。また、対自が欠いている存在は、即自である。それ故、私がそれであるところの無化の、目標と目的は、即自である。それ故、人間存在は、即自でありたいという欲求である<sup>(17)</sup>。」

このようにサルトルは、自己統合の欲求を存在欠如としての対自の「即自への回帰」の欲求として位置づける。この回帰の目標をサルトルは〈即自＝対自(en-soi-pour-soi)〉と名付けているので、自己統合の欲求は〈即自＝対自欲求〉と表現することができる。

自己統合の欲求が存在することは、経験的事実でもあり、心理学者によっても研究されているところである。人格心理学者のA・マスローは、人間の最も精神的に充実し、最も感動的な瞬間を「至高経験」と名付け、その特色として「至高経験は時空を超越する」「人間成熟の高い水準にあっては、多くの二分法両極性、葛藤は融合

し、超越し、解決せられる」「認知はどちらかといえば、自我超越的、自己忘却的で無我でありうる<sup>(18)</sup>」等をあげている。このような記述から分るように、至高経験とは、すべての矛盾対立を止揚し、絶対の統合性をもった涅槃の境地であり、ここでの文脈でいえば、自己統合の欲求が充足されている状態である、この状態において、事物や他者との融合、合体の感覚を伴うのは、事物を媒介とする変革、他者を媒介とする交流によって形成された客我が、主我と融合し、主我と客我の区別がつかなくなるからであろう。

サルトルが〈即自＝対自〉を「一つの意識の理想である。われわれが神と名づけうるのはこの理想である<sup>(19)</sup>」というように、宗教を生み出し求める原動力となった欲求は、自己統合の欲求である。従って、自己統合の欲求に対応する文化形式は、宗教に他ならない。

自己統合の欲求は、分析の対象にはなりにくいし、もはや欲求という言葉で表現すること自体相応しくないにしても、やはり人間の欲求の窮極的な形態として、人間性を論ずる上で不可欠な欲求であろう。

#### (4) 第三次基本的欲求のまとめ

(1), (2), (3)において、自己意識の成立に伴って、(1)自己規定の欲求、(2)自己実現の欲求、(3)自己統合の欲求が順に出現することを論じてきた。では、自己統合の欲求

は、どう展開するのであろうか。自己統合の欲求の永続的な充足は可能であろうか。それは、経験的な事実としてもありえない。サルトルは、そのような欲求の充足か不可能であること、即ち、自己の対自を〈即自＝対自〉に変身させようとする企てが、永遠に達せられるものではないことを彼の存在論から論証する。なぜなら、〈即自＝対自〉というような「かかる全体は、本性上、与えられないものである。というのも、かかる全体は、自己のうちに即自と対自との両立不能な性格をあわせもっているからである<sup>(20)</sup>。」従って、対自存在としての人間は、〈即自＝対自〉の境地に達した次の瞬間において、意識の無化作用の結果、たちまちにして〈即自＝対自〉は、対自へと転落する。しかし、対自存在としての自己は、対自存在である限りにおいて、再び脱自を通して〈即自＝対自〉であろうと欲する。しかし、〈即自＝対自〉への変身は、同じ理由によって再び失敗せざるを得ない。こうして、〈対自〉→〈脱自〉→〈即自＝対自〉→〈対自〉→〈脱自〉→〈即自＝対自〉→〈対自〉→……の無限の循環が、人間が人間である限りにおいて、一生展開されるのである。人間の欲求が窮極的に充足されることなく無限に展開するのは、第三次基本的欲求のこのような循環構造に由来するのである。

第三次基本的欲求の議論を要約すると次のようになる。

#### 人間性の全体構造

| 基本的欲求               | 基本的欲求の種類  | 統合系    | 統合機能         |
|---------------------|---|--------|--------------|
| 第0次基本的欲求<br>(生理的欲求) | 排 泄<br>呼 吸<br>休 息・睡 眠                                     | 脳幹・脊髓系 | 反射活動<br>調節作用 |
| 第一次基本的欲求<br>(本能的欲求) | 個体保存 { 摂食・摂水<br>安全<br>種属保存 { 性<br>哺育<br>基本的社会性 { 所属<br>攻撃 | 大脳辺縁系  | 本能行動<br>情動行動 |
| 第二次基本的欲求<br>(学習欲求)  | 感 性<br>認 知<br>活 動<br>シンボル化                                | 新皮質系   | 適応行為         |
| 第三次基本的欲求<br>(実存的欲求) | →自己規定<br>↓<br>自己実現 { 変革<br>交流<br>—自己統合                    | 前頭連合野系 | 愛と創造の行為      |



第三次基本的欲求の出現は、前頭連合野の発達を可能にしているという意味において、第三次基本的欲求を前頭連合野系に対応させることが正しいにしても、その出現の必要条件として他者（社会）を前提としているという意味において、第三次基本的欲求は、本質的に社会的な欲求であり、人間にのみ存在する欲求であるという意味において本質的に人間的な欲求なのである。

第三次基本的欲求の本質的重要性は、生物体としての人間からみれば、必要性から全く解放されているにもかかわらず、人間を固有に人間たらしめている特質、即ち人間性を動物性から区別している特質からみれば、必要不可欠な欲求であるという点である。

#### IV 人間性の全体構造

第Ⅲ章で展開した議論を表にまとめると、次のようになる。

人間性を以上のように、脳神経系の機能と造に基づいて、階層構造として理解する視点は、多様な相対立する人間観を止揚し、積極的に新しい人間像を描き出していく上で極めて重要である。従来、多くの人間観は、特定の基本的欲求を人間の根本的衝動としたり、特定のレベルの基本的欲求の観察や実験によって得られた法則をもって、人間行動のあらゆる現象を説明するものであるかのように主張するものであった。

各レベルの基本的欲求を支配する法則から得られる人間観をこれまで議論した範囲で極く簡単に示せば次のようなものである。第0次基本的欲求を支配する法則から得られる人間観は、機械的人間観である。なぜなら、この欲求の統合系である脳幹・脊髄系は、反射活動とか調節作用といった、ほとんど自動化され機械化された活動を支配しており、その活動のメカニズムがあらゆる人間行動を支配しているとみれば、人間は複雑精妙な機械と何ら異なるところがないからである。

第一次基本的欲求を支配する法則から得られる人間観は、行動主義的人間観である、行動主義的な人間観によれば、人間を行動にかり立てるものは、飢餓とか性とか苦痛な刺激といった第一次基本的欲求およびそれらと条件づけによって結びついた中性刺激であって、これらの欲求が十分満され、刺激がなば人間は何も行動しなければ非活動的受動的な存在であり、またそういう緊張が完全に緩和された状態が人間にとって最も快適な状態と考えるのである<sup>(1)</sup>。第一次基本的欲求は、個体保存か種属保存に直接かかわるものであるから、このような人間観は、人間が行動するのは結局のところ個体の維持をはかり種

を繁殖させることに役立つ限りであるという効用原理、経済原理に支配されているのである。この行動主義的人間観は、人間と下等動物の行動法則を同一視し、ネズミやハトの実験によって得られた法則が、人間行動の全体を支配しているかのようにみなし<sup>(2)</sup>、それでもって遊びや創造といった行為をも説明できると考えるのであるから、A・ケストラの表現を借りれば擬鼠的人間観<sup>(3)</sup>といえることができる。

第二次基本的欲求を支配する法則から得られる人間観は、このレベルの欲求が、認知、感性、活動等人間に与えられた諸器官を機能させること自体に伴う快の存在を予想していることから分るように、効用原理、経済原理に支配されない活動的人間観であり、「人間は本来好奇心の強い動物である」という人間観に代表されるものである。この人間観が行動主義的人間観とはっきり区別されるのは、特に学習理論に関してである。後者の人間観では、不快な刺激をさげたり、飢餓や性といった欲求を充足させるため、試行錯誤的にいろいろな反応を繰り返しているうちに、欲求を満すような特定の反応が強化され、同じような事態でその反応が選択されるようになること、それが学習に他ならなかったのに対し、前者の人間観では、環境内をあそびまわっているうちに、あるいは好奇心にかられて環境を探索するうちに自然に学習が成立していくというのである。言い換えれば、後者の考えでは、学習は他の欲求をみたす手段として行われ、学習行為自体は苦痛なもの、罰や賞がなければ行わないものとみるのに対し、前者の考えでは、学習への動機づけは、学習行為そのものに内在しており<sup>(4)</sup>、学習行為自体が機能的快をもたらすとみるのである<sup>(5)</sup>。このような楽天的な人間観は、人間を好奇心が特別に強い高等霊長類の一種とみているので、擬鼠的人間観にならうといえ、擬猿的人間観といえるであろう。

第三次基本的欲求を人間の主要な衝動とみる人間観は、サルトル流の実存主義的人間観であり、創造的人間観である。人間の行動は、体内の生理的状態の反映でも外部刺激の関数でもなく、自らの理想に従って自らが自己を創り上げていく存在であり、そういう存在でなければ、人間ではありえない<sup>(6)</sup>という人間観である。擬猿的人間観での好奇心は、拡散的好奇心であり、興味のうつろうままに次々と活動の対象をかえ、何ら価値的なものを産出しないのである<sup>(7)</sup>が、第三次基本的欲求に基づく活動には、持続性と志向性があり、特定の対象に対して集中的に働きかけることによって、対象そのものを自己の価値意識や理想に基づいて変革し、そこに何らかの価値的なものを産出するのである。そして、そのことを通して

自己自身が実現されるという積極的能動的人間観である。学習理論に関していえば、自己実現の対象として尊敬する人物が選ばれば、それは同一視であり、自己実現の目標として自己の能力を上回る水準が設定されれば、それは達成動機に他ならず、他者との交流を通して自己を実現しようとすれば、それは、相互性に他ならず、第三次基本的欲求はJ・S・ブルーナー<sup>(7)</sup>のいう内発的な社会的動機づけ（達成、同一視、相互性）のメカニズムをすべて説明するものなのである。

筆者の主張は、以上のような人間観のどれが正しく、どれが誤りであるというのではなく、それぞれの人間観は、人間性の全体構造の一つの階層を適切に表現しているという意味において部分的に正しいが、そこに見いだした法則が人間行動の全体をおおっているかのように考える点において一面性をまぬがれないということである。たとえ実存主義的人間観、創造的人間観であっても第三次基本的欲求が、人間性を動物性から区別する欲求であり、人間を人間たらしめている欲求であるという意味において、最も重要な人間観であるが、より低次の基本的欲求の十分な発達と充足をみないならば、自己実現も創造性も砂上の楼閣に終わってしまうであろう。

勝田が「人間は、その存在に他の動物と共通の基盤で連続的につながっている生物である。人間を生物としてとらえることは、人間をいやしめることではない。むしろ、私達は、人間の基本的権利の要求が深く生物としての存在に根ざしていることを理解すべきであろう。人間のということとは、動物的ということに対立する。しかし、対立するということだけでは、人間はその人間性のいわば基底を失う。飲食、性愛、睡眠その他動物と共通する欲求、生きるための基本的な欲求をつつみこんだままで、人間をとらえることをしなければ、人間性ということの意味は失われる<sup>(8)</sup>。」というのは、まさにこのことであり、新しい人間像は、「人はパンなくして生きる者にあらず」という視点と「人はパンのみにて生きる者にあらず」という視点をもとに含んだ人間性の全体構造の上に築かれねばならないであろう。生物進化史の過程において、次々に獲得してきた質的に新しい行動のすべてを包み込んで、それぞれを人間性の階層構造に正しく位置づけ、各階層を支配する固有の法則、階層間の相互関係、他者との関係における相互性と相剋性等々を正確に把握する時、初めて新しい人間像を描きうるであろう。

最後に、〈人間性は普遍である〉という筆者の主張は、上表のような人間性の階層構造が、すべての人類において、可能態としては共通しているという意味である<sup>(9)</sup>。人間性の普遍性を主張することは、決して人間を固定的

に捉えるものではなく、人間が無数の可能性を内に秘めた存在（脱自存在）であることを、自らの理論のうちに包み込んでいるのである。

サルトルは、人間の存在論的構造を「人間はその投企によって定義される。この物質的存在は、自分に対してつくられた条件をたえずのりこえる。それは労働、行動、或いは、仕事によってその状況をのりこえることにより自己を客観化し、その状況を明るみに出し決定づける。……与えられた構成的な諸要素をこえて、労働と実践による自己自身のこの不断の創造、これこそわれわれ自身の構造である<sup>(10)</sup>。」といい、

マルクスも理想的な人間像として「ゆたかな人間は、同時に人間的な生命発現の総体を必要としている人間である。すなわち、自分自身の実現ということが内的必然性として、必須のものとして彼のうちに存する人間である<sup>(11)</sup>。」と表現する。

実存主義者であるサルトルと唯物論者であるマルクスは、全くあい入れぬ思想体系をもちながらも、そのような思想体系の背後にあって、それを支える根源的な価値意識において共通しており、両者とも人間の本来的な姿として自己実現する人間像、現在の自己に与えられている条件を越えて、未来に希望をもって、社会的な交流の中で、積極的能動的に対象的世界に価値を創造し、そのことを通して自己自身を作りかえ、自己の可能性を実現していくという人間像、人間形成の視点からみれば、自己教育する人間像を描いていることは極めて重要であり、そのことは、人間の最深部にある価値意識の普遍性、言い換えれば、人間性の普遍性を示唆しているのではあるまいか。

## おわりに

本論文では、紙数の都合で筆者の人間性論の最も基礎的な骨格部分しか提示することができなかった。人間性の各階層内で欲求の相互関係、階層間での相互関係、欲求発生のメカニズム、第三次基本的欲求と低次の基本的欲求との相互媒介関係、基本的欲求の人間化と対応する文化形式、他者との関係における派生的欲求の出現、人間性と文化、社会との関係、様々な人間観、教育観の人間性の全体構造への位置づけ等については、ほとんど触れることができなかった。

さらに筆者の人間性の階層構造論は、人格、意識、感情、能力<sup>(12)</sup>の階層構造論にも発展しようという極めて広いパースペクティブをもつものであることを指摘し、筆者の今後の課題としたい。

人間性の普遍性を主張する筆者の議論に対して当然予想される反論にもあらかじめ答える余裕がなかった。しかし、人間をその普遍的位相において明らかにしようとする本論のような基礎作業をくぐりぬけることなしには、確固とした地盤の上に、人間の科学としての教育学を築くことも、教育実践を指導する教育における人間像を描くことも、とうていできないであろう。

## 引用文献・参考文献

はじめに

- (1) J. J. Rousseau: *Émile*, Garnier Frères 1964 p. 81
- (2) K. Boulding: *The Meaning of the Twentieth Century* 1964. 清水幾太郎訳『二十世紀の意味』岩波新書
  - I 人間性の定義
    - (1) 普遍的な人間性を否定するマルクスやサルトルの見解と本論文での人間性論とが如何なる関係にあるかは、稿を改めて論ずる予定である。
    - (2) J. P. Sartre: *Question de méthode* 1960 平井啓之訳『方法の問題』人文書院 P. 180
      - II 人間性の階層性と脳・神経系
        - (1) 脳神経系の構造と機能について論じることが目的ではないので、詳しいことは次の本を参照のこと。本論文の以下の議論についても同様である。  
岩波講座『現代の生物学 6 脳と神経系』1961. 岩波書店  
時実利彦編:『脳の生理学』朝倉書店 1966  
一般向けのものとしては、  
時実利彦:『脳の話』岩波新書 1962  
時実利彦:『人間であること』岩波新書 1970  
Paul Chauchard: *Le Cerveau Humain*, 山口雄三訳『人間の脳』白水社(クセジュ文庫)
        - (2) 同様な考え方は次のものにみることができる。  
H. Murray: *Explorations in Personality*, Oxford 1938  
外林大作編訳『パーソナリティ』誠信書房 I の p40
        - (3) P. MacLean: *Contrasting Functions of Limbic and Neocortical Systems of the Brain and their Relevance to Psychophysiological Aspect of Medicine*, in, *American Journal of Medicine* 1958 Vol 25 p611-626
        - (4) L. von Bertalanffy: *Das Biologische Weltbild*, A. Francke AG. Verlag. 1949  
長野敬, 飯島衛共訳『生命』みすず書房 p. 19
      - III 基本的欲求の種類
        2. 第一次基本的欲求
          - (1) A. Fisher: *Chemical Stimulation of the Brain*, in, *Scientific American* June 1964 pp60-68
          - (2) M. Fried et al: *War-The Anthropology of Armed Conflict and Agression* 1968 大林太良他訳『戦争の研究』ペリかん社 p. 72
          - (3) J. Carthy et al ed: *The Natural History of Aggression* 1964 香原志勢他訳『攻撃性の自然史』ペリかん社 p. 94
            3. 第二次基本的欲求
              - (1) J. Dollard and N. E. Miller: *Personolity and Psychotherapy*, New York MacGraw-Hill, 1950, pp67-69
              - (2) J. Freud: *Das Unbehagen in der Kultur* 1930 吉田正己訳『文化論』日本教文社, pp38-58
              - (3) G. Allport: *Personality-A Psychological interpretation* 1937. N. Y. Holt Rinehart and Winston. pp190-194
              - (4) R. Linton: *The Cultural Background of Personality* 1945 清水幾太郎他訳『文化人類学入門』創元新社 p. 23-24
              - (5) W. Heron: *The Pathology of Boredom*, in *Scientific American* 1957, January
              - (6) R. Butler: *Discrimination learning by Rhesus monkeys to visual-exploration motivation*, in, *J. comp. physiol. Psychol.* 1953, 46 p. 95-98
              - (7) H. F. Harlaw: *Learning and satiation of response in intrinsically motivated complex puzzle performance by monkeys*, in, *J. comp. physiol Psychol.* 1950, 43, 289-294
              - (8) シンボル化の欲求が、他の欲求に還元されえない基底的欲求であることは、S. K. Langer: *Philosophy in a new Key*, 1941, 矢野万里他訳『シンボルの哲学』pp. 29-60 に詳しい。引用は同書 p. 47 より。
                4. 第三次基本的欲求
                  - (1) E. Fromm: *The Sane Society*, New. York 1955. 加藤正明他訳『正気の社会』社会思想社 p. 41
                  - (2) V. Frankl: *Theorie und Therapie der Neurosen*, Wien, 1956 霜山徳爾訳『神経症 II』みすず書房 p. 11
                  - (3) J. P. Sartre: *L'être et le néant*, Gallimard 1943 p. 115
                  - (4) J. Piaget et B. Inhelder: *La Psychologie de L'Enfant*. P. U. F.《Que Sais-Je?》N°369 pp, 103-104, pp. 118-120
                  - (5) J. P. Sartre: *L'être et le néant*, Gallimard 1943. p. 183
                  - (6) J. P. Sartre: *L'existentialisme est un humanisme*, Nagel, 1946. p. 55
                  - (7) C. Rogers: *The Complete Works of C. R. Rogers* 12, 村山正治編訳  
ロジャーズ全集12『人間論』岩崎学術出版社 p. 230
                  - (8) K. Goldstein: *The Human Nature in the Light of Psychopathology* 1947 西谷三四郎訳『人間』誠信書房 p. 135
                  - (9) A. Maslaw: *Motivation and Personality* 1954 pp. 80-97
                  - (10) K. Marx: *Das Capital Band I*, 1867 長谷部文雄訳『資本論 1』河出書房 p. 151
                  - (11) K. Marx: *Ökonomische-philosophische Manuskripte aus dem Jahre 1844* 城塚登他訳『経済学・哲学草橋』岩波書店 p. 97
                  - (12) L. Feuerbach: *Das Wesen des Christentums* 1841 般山信一訳『キリスト教の本質』岩波書店, 上の p. 188-189
                  - (13) C. Cooley: *Social Organigation* 1909 大橋幸他訳『社会組織論』青木書店 p. 13
                  - (14) その具体的な姿を描いたものとしては、  
K. Marx:『経済学ノート』杉原四郎訳, 未来社 pp. 117-118 を参照のこと。
                  - (15) B. Pascal: *Pensées*, 松浪信三郎訳『パンセ』河出書房 p. 45
                  - (16) B. Pascal: *ibid.* p. 47
                  - (17) J. P. Sartre: *L'âtre et le néant*, Gallimard 1943 pp. 652-653
                  - (18) A. Maslaw: *Toward a Psychology of Being* 1962 上田吉一訳『完全なる人間』誠信書房 pp. 102-136
                  - (19) J. P. Sartre: *L'être et le néant*, Gallimard 1943. p. 653
                  - (20) J. P. Sartre: *L'être et le néant*, Gallimard 1943. P. 133
              - IV 人間性の全体構造
                - (1) C. Hull: *Principles of Behavior* New York 1943 能見義博, 岡本栄一訳『行動の原理』誠信書房 pp. 16-18
                - (2) B. Skinner: *The Flight from the Laboratory*, in, M. Marx(ed), *Theories in Contemporary Psychology*, Macmillan 1963 pp. 336
                - (3) A. Koestler: *Ghost in the Machine*, Hutchinson 1968

- (4) J. McV. Hunt: Intrinsic Motivation and Its Role in Psychological Development, in, Nebraska Symposium on Motivation 1965 pp. 196-197
- (5) J. Piaget: Equilibration and the Development of Logical Structures, in, Discussions on Child Development. Vol4, Tavistock 1960 p. 105
- (6) J. P. Sartre: L'existentialisme est un humanisme, Nagel, 1946, p. 55
- (7) J. Bruner: Toward a Theory of Instruction, Norton 1966 pp. 113-128
- (8) 勝田守一:『教育と教育学』岩波書店 1970 p. 135
- (9) 同様な考えは次のものにみられる。
- R. E. Evans: Dialogue with Erich Fromm 1966, 牧康夫訳『フロムとの対話』みすず書房 p. 64, また, 人間の普通な位相を明らかにすることの積極的な意義については, 稿を改めて論ずるつもりである。
- (10) J. P. Sartre: Question de Methode 1960 平井啓之訳『方法の問題—弁証法的理性批判序説』人文書院 pp. 155-156
- (11) K. Marx: Ökonomische-philosophische Manuskripte aus dem Jahre 1844 城塚登訳『経済学・啓学草橋』岩波文庫 p. 144
- (12) 能力の構造論については, 拙稿『能力の構造』(東京大学教育学部紀要 1974. No. 14) を参照。